

吸血鬼ちゃんとドキ☆
らぶ日常生活♡

リア充撲滅委員会

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通に生活を送っていた主人公「悟」の目の前に現れた、凜蝶と名乗る吸血鬼。悟はどうなってしまうのか。

第1話

目次

1

第1話

一章 『自称吸血鬼現る』

俺は普通に中学生生活を送っていた。

ある日、その生活は幕を閉じた

こいつが現れるまでは。

それは唐突だった。

「お前、うちに血をくれないか？」

と、凜蝶と名乗る吸血鬼が俺に言ってきたのだ

感動的な出会い…でも何でもなく

ただ現れただけだ。

なのに、何かを感じた

こいつ…俺に似てるな、と。

「ところで…何でここに？」

俺は質問してみた

「血が欲しいからだ」

即答された。

「いや、ここに来たりゆ」

「血が欲しいからだ」

何を聞いても普通に返された。

(なんでこうなるのおおお?!)

そして、血を吸われる生活が始まった。

今日もまた、血を吸われている

鉄分をくれええええ

とかずっと思いつながら。

「お前美味いなー!」

とか言ってるけど人間にはわからん

「そーなんだー」

とりあえず返しとく

こいつは見事に学校に来た

てか転入してきた

どこのアニメフラグだよ…

と思ったことは静かにしておく

これから先、俺どーなるの？

と思つた矢先

隣が凜蝶だった。

とてつもなく嫌な予感しかしない。

どうにかして逃げたい

神様に願つた夜が3週間続いたことは

言うまでもない。

「助かりてえ…」

俺は涙目で、空に言つた。

二章 『平和、行方不明中』

血を吸われながら生活している俺だが、唯一の友達とも遊んでいる。

「よっ！・さとつち！」

「おお！健ちゃん！」

こいつの名前は新嶋 健太郎。

小学校からの幼馴染みである彼だがもう1人、幼馴染みがいる。

「あー！さーちゃんだ！」

「一緒のクラスで良かった！」

「あとケンタウロスもいるんだ！」

こいつは清村 理緒。俺達のムードメーカー的存在だ。
面白くて、みんなを明るくしてくれる。

「その名前で呼ぶな！」

健ちゃんが言った。

やはりケンタウロスは嫌なのか。

いや…誰でも嫌か！って納得しとこう。

家に帰った俺は、リビングに行く。

すると後ろから凜蝶が現れ、

「ねえ！血いちよーだい！」

紛れもなく人間離れた話だった。

「嫌だ」

とりあえず断ってみる

「吸わせろ」

即答。

仕方が無いので吸わせる事にした。

必死に吸っている所を見ると、

なぜか可愛いと思えてくる。

それは10分程続くのだが：

こいつの心拍数が上がってる気がする。

「おい、心拍数上がってないか？」

「そぉかもおぉ」

赤くなつた顔で言ってきた

熱かと思つたが、熱はない。

「なんで赤いんだ？」

と、眩いた

すると凜蝶が

「なんか君といると〜」

「凄いだキドキして〜」

「身体…熱くなるの〜」

完全なる好意だと察した俺は、

覚悟を決めて聞いてみた。

「お前…俺の事好きか？」

「うん！大好き〜！」

やっぱりか。

なんか驚きすぎて声が出ねえ。

まず、吸血鬼に惚れられたことが無い。

「ねえ」

急だった

「何？」

「うちと…付き合ってた？」

「?!」

あまりに急すぎて反応が遅くなった

だが…断ったら何されるか分からないので

「いいよ。付き合おう。」

心無しか言っていた。

「やっつったー！」

「よろしくねー！」

「あ、うん。よろし」

ガバツ

(?!)

凜蝶が、抱きついてきた。

こいつ地味に胸がデカいから当たる。

俺は悟った

(こいつ…エロい?!)

こうして吸血鬼との生活、というか

ラブラブと言わざるを得ない生活が始まった。

三章『恋愛はスタート位置へ』

こうして吸血鬼との恋愛が始まった…のはいいが

とてつもなくべったりだ。

「ぎゅーしてー!」

「子供かつ」

「ねーえ!」

こんな会話が毎日続く。

「むう…」

「仕方ないな」

そして凜蝶に抱きつく。

「はにゃあ〜♡」

猫のような声を出して喜ぶのだが…

それがとてつもなく可愛い。

(てか何だよこのいい匂い！)

そして胸が大きい分下を向くと谷間が見える。

どうしてもはずつと見てしまう。

とうとう変態になったか、俺。

いやいや、そんなはずはない

自分にツツコミながら凜蝶を離す

すると凜蝶が

「ねえもつと〜」

なんだこのオネダリ星人モットマンは。

1回で終わらせたい俺は聞いた。

「何をすればいい?」

「えーつとー…キス！」

「はあ?!」

キス? いや何でそうなる?

「やってー?」 んー

いやいや準備体制に入るなよ

仕方が無いのでやってやる。

「ぎゅーしちゃえー!」

しまった。 罨だった。

その後、遊ばれまくった俺だが

「お風呂入ろー?」

「いってら」

「いや、だから一緒に入ろ?」

「は?」

いやいやいや

何故そうなるんだ吸血鬼よ

思春期の男女が共に風呂に入るって

どういう頭してんだよっ!

「やだ」

「えー！」

「入ろーよー！」

「やだ」

「むうー…」

よし、諦めた。

さーて俺はスマホでもっとー

テクテク

なんだこの音は

テクテク

RPGみたいな音立てんなよバカ

ポスっ

まて、隣に座ってるの誰だ

この髪の毛の匂い、そしてオーラ

…間違いなく

「凜蝶何してんだ」

「入ろ」

バスタオルを身体に巻いて準備したのか
って待て？バスタオル？

まさか…この下はっ

HA・DA・KA?!

そんな期待は置いといて。

「入らないって言ってるだろ」

「身体で言うこと聞かせる」

むにゅっ

あ、この感触…

そーか。俺の腕は谷間に入ったか。

って谷間?!

見ちゃダメだ、絶対ダメだ。

「あの一…凍蝶一…」

うるうる

なっ…泣いてる?!

入るしかないのかこれは

「入ってやるから…泣くなよ」

「わーい！」

ペロっ

「待て待て待てタオルが、タオルが！」

「んー？」

「別にいいじゃーん♡」

ぎゆう

（やめろ。理性飛びそうになるから。）

…というわけで風呂の中にいる。

やはりタオルだ何だという事より

こいつの胸の大きさが非常に気になる

「お前バストどれくらいだよ…」

「え？」

（しまったっ！口に出たっ！）

「うちねー」

「Gだよー」

「へえー、Gなんだー」

（つてG?!）

人間じゃねえ…

※そもそも人間じゃないです

「触る？」

「いや、いい」

「おっけー」

それよりも…

耳をかぶってほしい！

可愛い声出そう！

「…」

かぶっ

「ひにゃあっ?!」

はむはむ

「にゃ…ダメえ…」

やっぱ…エロいw

「ごめんごめん」

「むー」

「許可とってからやってよー!」

「わかったわかった」

あ、でもやる事に関してはOKなのね

そして、風呂から出て寝ようとしているのだが…

「ふふーん♪」

「何でお前がここにいんだよ」

「一緒に寝るのも日課だにゃ♪」

とんだ奴と付き合った…

腕に抱きつかれているため

俺は寝れない。凜蝶はぐっすり。

時々顔が耳元に来るのがドキドキする。

一言で表すと理性が飛びそう。

四章『エロと俺と吸血鬼』

光がカーテンから射し込む

「朝か…」

横を見ると吸血鬼が寝ている。

「可愛いなあ」

俺は眩いた。

こいつの事、好きになりそうだな

自覚してた。さすが俺。

朝ごはんの支度をしていると、凜蝶が起きてきた

「さとる……おはよ……」

「おはよ。」

初めてこいつが俺の名を呼んだ

トコトコ

凜蝶が俺のところに来た。

「何？」

「いや……ねむい……」

「じゃあ寝てこいよ」

「さとると寝たい……」

討論終わり。

「じゃあご飯食べたらな。」

「うん……」

「ご飯を済ませて布団に入る。」

凜蝶が寝て、俺はそこから離れようとした

その時だった。

「やあ、恋人さん」

「誰だ？」

「あたしの名はジザベル。」

「闇の女王さ」

「……ごめん話に付いてけない」

「それはすまないね」

「ご飯食べる？」

「是非とも」

そして、闇の女王とやらは「ご飯を食べた。」

「あんた……凜蝶の恋人だった？」

「ええ、まあ一応」

「ふうん」

「付き合ってるのがどんな奴なのか、知ってるの？」

「吸血鬼なんじゃないですか？」

「いや、あの子は魔界の頂点に立つ人だよ」

「へー」

驚くどころか反応ができない。

「凜蝶のこと、好き？」

「ええ、寝てる顔が可愛いですよ」

「あんた…驚かないの?!」

「ええ。冷静さには自信があります。」

「全く驚いたわねー」

いや、実際俺が1番驚いてるわ

「ま、凜蝶をよろしくね」

「あ、はい」

「あと、服装バスタオルにしたから(？▽?)」

「え？」

「そゆことです」

帰ってった。

どういう意味なのか分からない。

とりあえず凜蝶のところに戻ってみた。

「…なるほど、そういう事か」

凜蝶の寝間着が…バスタオルになってる。

やばいタオル剥がしたい。

「んあ…」

「あ、起きた？」

「…?!」

「ねえ何この服装！」

「ジザベルって奴がやってたー」

「あのババア…」

「(？・ω・?) ジー」

「な、何？」

「いや、エロいなーって」

「？」

「胸、触りたい？」

「え、いいの？」

「こんな事聞かれるのは初めてだ」

「ほら」

（さすがに生ではないか）

むにゅっ

「はあうっ」

「あ、ごめん」

「大丈夫…」

「ちよつと感じちやつただけ…」

（いや、普通にエロい）

むにゅむにゅ

「いやっ…あっ…」

「そろそろやめるね」

「あ、うん…」

（もつと触って欲しかったな）※凜蝶

「着替えな」

とりあえず服を渡し、俺はリビングに行く

凜蝶はバスタオルのまま俺の手を掴んで付いてくる

「着替えないの？」

「後で着替える」

なんかエロいから着替えて欲しい

「ふー」

「疲れた」

テレビポチッ

「…」

「ん？凜蝶どうした？」

と言った瞬間、凜蝶が膝の上に座ってきた

バスタオルで

向こう向いて

「どうしたの？」

「…っつて」

「？」

「…っつてして」

「なに？」

「ぎゅーっつてして！」

「あ、うんわかった」

言われるままに抱きつく

「ねえさとする」

「なに？」

「…大好き♡」

「?!」

急すぎてびびくりした

でも落ち着く…

「さとする、ありがとう」

「うち…婚約させられるの」

「な?!」

俺の口から出た

「お前は俺のもんだバカヤロー！」

「っ!？」

「誰にも渡さねえよ！」

俺は叫んだ

「なんだ…眠い…」

俺は…目を閉じた。

五章 『消えた愛人』

「…?!」

凜蝶が、いない

「凜蝶は?!」

「魔界に連れてかれたよ」

ジザベルが言った

「何で?!」

「婚約させられるって言ってたろ?」

「それでだよ」

驚きと共に悲しみがこみ上げてくる

「助ける方法は無いのか」

「あんたが魔界に行くしか」

「連れてけ」

俺は躊躇なく言った

「あんたの命が無くなるかもしれない」

「連れてけ！」

く魔界く

愛し合うと神に誓いマースか？

王子「はい」

凜蝶「…」

「姫？さあ。」

「…」

バアンツ※扉を開く

凜蝶「?!」

俺は…最大出力で叫んだ

「俺の恋人を奪う奴は誰だアアアア!!!」

「さとりー！」

「凜蝶…来い！」

「うん！」

王子「待て」

王子「お前は誰だ」

「凜蝶の恋人だよ」

「型にはめられてない」

「本物のな」

王「認めないぞ！」

王「取り返せ！」

「無駄な足掻きを…」

「ザ・ワールド」!!

(時よ、止まれ。)

※兵士蹴散らす

(そして時は動き出す)

兵士「ぐあああああ!!」

王「なにが起きたっ!!」

「これが、本当に愛してる証拠だよ」

そして俺は…凜蝶にキスをした。

「?!」

そりゃ驚くよな。急にされるんだからw

そのまま舌を入れた。

(完全なディープキスの完成だな)

「さ……とる?」

「連れ戻す。」

「待ってろ。」

「うん……」

そして、指を鳴らし

瞬時的に家にワープした

「さとる……さとるなんだ……」

何言ってるんだこいつ。バカか。

「急に消えるなよバカ野郎」

「さとるー……つ!」

ぎゅー……

「怖かったよ……」

無理もない。無理やり婚約させられるからな。

「多分、追いかけて来るだろ。」

「風呂、一緒に入るか?」

「うん!」

そしていつも通り風呂に入り

いつも通り寝た。